

(次頁に続く)

森本さんの剣舞は、東播磨支部のホームページに動画が掲載されています。是非ご覧ください。「大樟会東播磨支部」で検索してください。

http://ookusukai.sakura.ne.jp/



## 第5回総会開催予定 平成27年10月25日 (日)

今後は、10月の第4日曜日で固定して開催予定ですので、スケジュールの調整をしていただいて、たくさんの方の参加をお待ちしています。

定例役員会開催予定

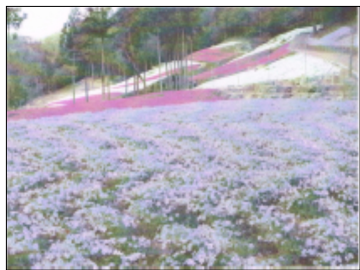
- ・ 3月22日 (日)
- ・ 6月21日 (日)
- ・ 8月23日 (日)
- ・ 9月20日 (日)

## 事業・イベント部会の行事として、

ヤマサ蒲鉾(株)様の工場見学(姫路市夢前町)を2015年5月に予定しています。



芝桜が大変有名のようです。たくさんの方の参加をお待ちしています。  
http://www.e-yamasaka.com/shirasakura/img/park.jpg



## 「東播磨支部レポート」続き

### 【江戸下向】

慶長10(1605)年、武蔵は江戸に入った。武蔵の名は、京都の吉岡一門との対決で武芸者の間では知れ渡っていたため、すぐさま挑戦してくる剣豪がいた。棒術の達人、背は六尺豊かな大兵、夢想権之助であったが、割木を持った武蔵に、一撃をくらうその場を立ち去った。翌年武蔵は、柳生家の士、大瀬戸隼人、辻風何坊を進んできた処を討ち、敵は倒れて手水鉢で背骨を打ち気絶。のち辻風は病にて死んだ。その後武蔵は、数年間江戸で剣術を磨き、門弟たちにその技法を伝授していた。慶長16(1611)年の暮れに武蔵が江戸を離れる頃、門弟たちは武蔵の絵姿を描いてこれを日夜礼拝していたという。

その頃、江戸で伊藤一ノ斎から剣技の手ほどきを受けてい

た若い剣客こそ、佐々木小次郎であった。その後小次郎は天下無双の名声を得、豊前小倉藩の剣術指南役に上がりつめた。



慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いに敗れ、豊前中津城主の黒田如水(慶長9年3月没)を頼った新免衆の中に黒田家への士官からあふれた六人衆がいた。彼らはその後細川忠興に拾われたが、巖流と称し天下無双を自称している佐々木小次郎より、かつての同郷である武蔵こそその名に値すると思われていた。その後筆頭家老の仲介により、舟島での決闘が実現した。

### 【巖流島の決闘】

宮本武蔵と、巖流秘剣燕返し。佐々木小次郎との仕合は、慶長17(1612)年4月13日、辰の上刻(午前7時)と決められた。武蔵はこの仕合のために種々の策を用いた。武蔵は舟島に向かう舟の中で綿入れを纏って横になり、体調維持に努めた。小次郎は三時間もの間潮風に肌を晒して苛立っていた。小次郎は物干し竿と呼ばれる長刀を抜き、武蔵は櫓を削った木刀を構える。じりじりとにじり寄った小次郎が、長刀を一閃すると、武蔵の足が地を蹴り宙を舞った。武蔵の鉢巻が二つに斬られたが、同時に小次郎の頭は櫓の木刀で微塵に打ち砕かれていた。ここまでは通説であるが、次のような異説もある。

武蔵が去ると物陰に隠れていた武蔵の弟子たちが出てきて、小次郎に息があるのを知ると、止めを刺した。これを聞いた

小次郎の弟子たちが大挙して島に向かった。弟子たちのなしたことを知った武蔵は事態の收拾のため、門司城代の沼田氏に救いを求め、その後豊後に住んでいる父無二斎の所に送られた。



### 【肥後の国】

明石藩主小笠原忠真が豊前の国に国替えとなったために小倉に移った。武蔵も翌々年51歳の時、忠真の客分となり、寛永14(1638)年54歳の時、島原の乱で伊織とともに忠真の陣に軍監として出陣した。

### 【播磨の国】

翌々年武蔵は31歳の時、大坂冬の陣に西軍として参戦。そして翌年の元和元年(1615)年、大坂夏の陣にも参戦したと言われている。その後播磨の国に帰り、数年間姫路城下で暮らし、41歳の時、伊織を養子にした。この頃明石城下の町割りもしたと思われる。

### 【豊前の国】

宮本伊織は、寛永9(1632)年元

